

ジオロジー鉄道の旅 後免編（その2）

南 寿宏

5 TE20領石通

とさでん交通電車の折り返し点。紀貫之船出の地の候補。貫之は、帰京にあたって、道中を土佐日記として著した。その冒頭は次のとおり。

男もする	日記といふものを 女もしてみむとて	するなり
男の人がするとお聞きする	日記といふものを 女の私もしてみることに	しよう

助動詞『なり』には、終止形に接続する伝聞『なり』と連体形に付く断定『なり』がある。前掲文にはその両方が載っており、古文文法で必ず出てくる。

なお、ここでは、紀貫之は、女性として、この文を記している。

承平5年（934年）12月、土佐の国守としての任期を終えた紀貫之は帰国の途に就く。国府から関（領石通の字名）まではほぼ直線。その名残は現地で見ると一目瞭然。また、右図でも確認できる。

大原則「古代から道は変わらない」

大津まで船で移動したという説（浜田春水（1964））もある。浜田説なら、国分川移動となる。大津までは小さい船で、大津で大きい船に乗り換えたか。

浜田春水（1964）：大津考 土佐史談，No.106, p1-8

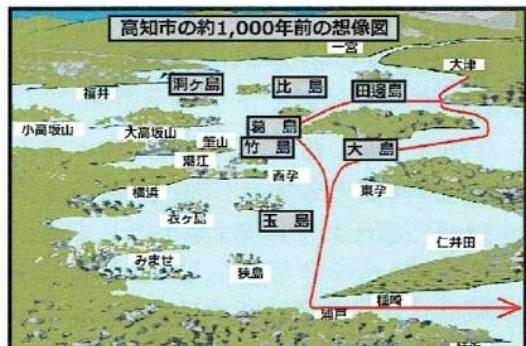
紀貫之船出の問題は、彼はどこから船に乗ったかであり、古来より議論された。候補地点は2つ、関と舟戸。関は領石通電停、舟戸は舟戸電停の最寄り。

鹿児崎といふ所に、守の兄弟、また、こと人、これかれ酒なにと持て追ひ来て、磯に下りみて、別れがたきことをいふ。

船が出港してすぐ、鹿児の崎で、酒やなんかを持って、見送りの人が岸を追っかけてきた。すると船は停まり、皆は磯におり、別れがたいと言う。そして酒盛りが始まる。いかにも酒好きの土佐人らしいエピソードなのだが、このことから、乗船が鹿児以西ということではなく、関と舟戸の間となる。詳しい論証は次号に譲る。

934年当時の浦戸湾の海岸線想像図は右図のとおり。大津はまさに大きい津（港の意）である。当時の浦戸湾は、今よりはるかに広く、紀貫之の乗った船が大島（五台山）の北か南かどちらを通ったかは不明である。浦戸湾はその後、国分川、下田川等による砂泥の堆積、堤防設置により、陸地化されたが、今でも海面以下の地は多く残っている。これを0メートル地帯といいう。五台山が0メートル地帯によって囲まれていることは、国土地理院地形図から明瞭。

（地形図は本号p12に掲載）



※※島は浦戸湾7島

現在も島なのは玉島のみ

大島は現在の五台山

二葉町防災振興より南編集

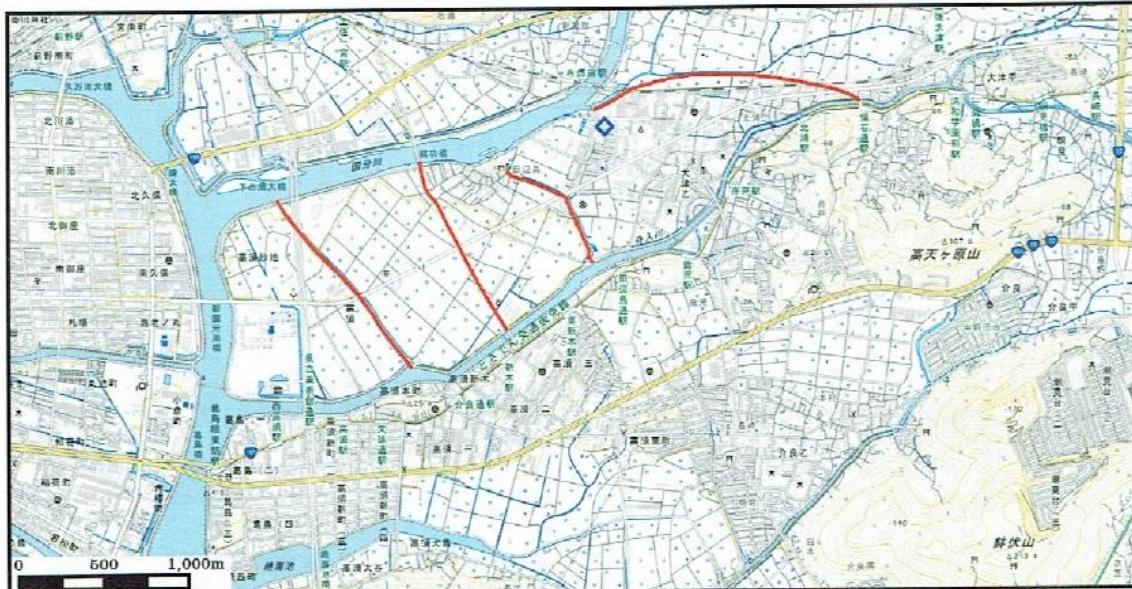
赤線は紀貫之の帰京ルート予想図

6 TE19北浦

駅名は歴史の化石である。地名は地元自治体の権限により変更が比較的容易であるが、駅名は運輸省・国土交通省の手続きが複雑だから。

北浦という停留所名は、まさに、その北に海が広がっていたことを示す。

この停留所は、いわゆる『ノーガード電停』であり、道に白線が引かれているのみである。東行電車からの下車の際には、注意が必要である。道に不慣れな運転手が多い4月は特に注意。私は2回、はねられかけた。



高知市高須～大津の国分川・舟入川間の中堤

国土地理院HPに南寿宏加筆

赤線が中堤 ◇は大津西塩田公園

当時の為政者（長宗我部・山内あたりか）は、浦戸湾を干拓するため、湾内に堤防をいくつか建築した。この干拓堤防を中堤（なかづみ）という。陸地の中にある堤防だからである。国分川と舟入川を結ぶ中堤は、上図のように、4本確認される。そのうちの1本を観察する。

北浦で下車、北に、舟入川・大津バイパス・JR土讃線の順に横切る。田の中に一筋の小道がある。これが中堤である。水田より2～3メートル高くてほぼ平坦な、歩きやすい道である。堤防の北東側（陸側）に水路があることに注意。

しばらく行くと、国分川にぶつかる。そこには、ポンプ場がある。堤防内にたまつた水を川に出すためのものである。中堤にはポンプ場が付き物である。

なお、中堤の西端に近い高知市大津乙には、高知大津西塩田公園（右図）がある。このことから、干拓地は、当初は塩田として使用されている可能性が示唆される。浜田春水（1964）は、舟戸近くの治部塩田など、当地の成り立ちを暗示する地名を複数個、記す。

なお、右写真はgoogle street view から。



浜田春水（1964）：大津考 土佐史談，No.106, p1-8

7 TE17鹿児

『かこ』は、今は『鹿児』であるが、昔は『水主』と書いた。鹿児は古い地名で、紀貫之の時代からあった。貫之を運んだのは、鹿児に住んでいた水主である。

(『か』は楫(かじ)、『こ』は人の意)船をこぐ者。ふのり。すいふ。(広辞苑第六版)

停留所のすぐ東で線路は急カーブを描く。プラットフォームの東端が削られているのは面白い。車体の長い電車を通すために、削ったのだろうか。

停留所前には、高知城東病院がある。地形図を見てみよう(下左)。病院敷地のすぐ東に、水路の存在することが示される。その川をはさんだ北側には、水路を延長する位置に黒実線(細道)が観察される。このことから、過去の舟入川の蛇行が考えられる(下右に予想水路を赤で彩色)。この考えが正しければ、病院の敷地は、かつての河川敷であったことになる。

時間があれば、鹿児～舟戸間の旧河道をたどってみたいものだ。



鹿児周辺地形図
(国土地理院HPに加筆編集)



鹿児周辺地形図
(赤は蛇行跡予想)

とさでん交通後免線 停留所コード一覧 (南寿宏・私案)

TE01	デンテツターミナルビル前	TE09	西高須	TE17	鹿児	TE25	小篠通
TE02	菜園場町	TE10	県立美術館通	TE18	舟戸	TE26	篠原
TE03	宝永町	TE11	高須	TE19	北浦	TE27	住吉通
TE04	知寄町一丁目	TE12	文珠通	TE20	領石通	TE28	東工業前
TE05	知寄町二丁目	TE13	介良通	TE21	清和学院前	TE29	後免西町
TE06	知寄町	TE14	新木	TE22	一条橋	TE30	後免中町
TE07	知寄町三丁目	TE15	東新木	TE23	明見橋	TE31	後免東町
TE08	葛島橋東詰	TE16	田辺島通	TE24	長崎	TE32	後免町